

“人間と性”

一般社団法人“人間と性”教育研究協議会
〈性教協〉会報 No. 378 2022.12.25



発行：“人間と性”教育研究協議会/発行責任者：水野哲夫
〒151-0071 東京都渋谷区本町1-7-16 初台/ハイソ1006号
<https://www.seikyokyo.org> Tel 03 (3379) 7556

視点

「言葉」の重要性

徳島サークルは、約30年前の立ち上げから今日まで、小野寺真澄代表のリーダーシップのもとで活動を続けてきました。ここ数年小野寺さんから何度も代表の交代を求められていました。小野寺さんの後を引き継ぐことは勇気のいることでしたが、この度2人体制ということで高橋三枝子さんと私（高橋勤子）で代表を引き継ぐことになりました。よろしくお願いします。

今、振り返ってみると私が性教育に関わるようになった原点は、40年近く前で、富田中学校に初めて赴任した時です。そこで、性教育主任をされていた小野寺さんと性教育に出会いました。そのころ富田中学校では、性教育が各学年の教育課程に位置付けられ、全校を挙げて取り組んでいました。新しく赴任した先生たちに性教育指導についての説明会があり、そこで小野寺さんは「ここでは、自分のお茶は自分で入れて後始末も自分でします。人の湯のみまで洗わなくてよろしい。またお茶を入れてきましょうかなど気を遣わなくていいです。みなさんの仕事は教師です。お茶くみではありません。自分の仕事をしっかりやってください」というようなことを話されました。お茶くみは女性の仕事という慣習がまかり通っていた当時、うれしい衝撃を受けました。ここから始まった学びは今も続いています。

当時、私は周りの人に注意されて不満や違和感を覚えることがしばしばありました。性教育を学んでその正体は性別を理由に行動を制限されることへの不満や違和感だと気づきました。そして性別を理由とした批判は差別なのだと知りました。何かの文章に「人は新しく知る言葉によって新しい物の見方ができるようになることがある」と書かれていました。性教育との出会いと学びの中から、「言葉」が自分の中に新し

い視点や価値観を教えてくださいました。

習慣的に使われている言葉の中には差別的な意識を支えるものもあります。例えば「〇〇ちゃん」「△△くん」のように性別による使い分けがある言葉です。使っている人は、その裏に潜む差別意識に気づかず習慣として使っているのですが、それは知らず知らずのうちに差別を後押ししていることになるのです。

その一方で、ものの見方を変える言葉もあります。例えば「セクハラ」です。職場で性的な言動で不快な思いをしていた多数の人にとって「これは冗談などではなく『セクハラ』であり、犯罪なのだ」と、言葉と共に認識できるようになりました。最近では東京五輪組織委員会の「人権」の低さが露呈する不祥事が続きましたが、反面、「多様性」と共に「LGBTQ+」という言葉が取り上げられ、広く認知される契機にもなりました。

言葉は、社会を前進させる力がありますが、浸透するのに時間がかかります。今までの価値観に異議を唱える言葉もあり、風当たりが強くなる場合もありました。特に性に関連する考えには感情的に反応する人が出てくることもあります。そのような中でも新しい価値観や考え方のため、言葉の重要性を根気強く訴えて、普及させた多くの先輩方の努力に見習い、これからも活動を続けていきたいと考えています。



高橋 勤子
(性教協徳島サークル代表)